

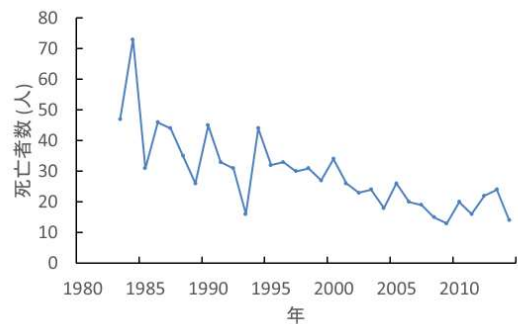
# スズメバチと仲良くなろう！

高知大学発ベンチャー  
株式会社K I N P 代表取締役  
高知大学農林海洋科学部教授  
金 哲史

## はじめに

毎年秋になるとスズメバチに関する特番がたくさん組まれて、その脅威がクローズアップされます。事実、スズメバチはおそろしい虫で、年間20人前後の方が、多い年で80名近くの方が亡くなっています。熊で年間0か1人、マムシやハブで5名前後が亡くなっていることを考えると、やはりスズメバチの恐ろしさは一目瞭然です。この被害を受けられた方の中には遠足で被害にあわれる幼小中学生や森林関係を生業とされる方が少なからず含まれています。死に至らなくても、スズメバチ類に刺された方は相当な数おられますし、次に刺されたらアナフラキシー症を引き起こし、死ぬかもしれないという恐怖感は、想像するだけでも身震いがします。

この被害を防止するために、山に入られる方には、なるべく白い帽子を被り白い服装で、あるいは、防護服を着て行きなさいと推奨されていますし、万一刺された時のために、ハチ毒吸引用具やアナフラキシー症状を抑えるためのエピペン注射剤の携行が時には義務付けられています。しかしながら、これらの予防策が完璧でないことを右のグラフは物語っています。



蜂刺傷による全国の死亡者数  
(厚生労働省人口動態調査による)

## スズメバチ類は益虫

先に述べたように、スズメバチ類は、多大な人的被害をもたらすと同時に、養蜂農家にとっては、憎むべき「防除対象害虫」です。しかしながら一方で、食物連鎖の頂点に立っており、秘かに農業害虫を駆逐してくれる極めて優れた「益虫」であることも事実です。初夏に、青虫やガの幼虫を肉団子にしている姿を目にした人も多いのではないのでしょうか？この益虫であるスズメバチ類を一方的に防除してしまうことは、スズメバチ類の減少→農業害虫の増加→殺虫剤散布の増加→環境汚染→ミツバチの減少 と言う「負のスパイラル」を生み出すことになります。むしろ、スズメバチ類の保護→農業害虫の減少→殺虫剤散布の減少→環

境の健全化→ミツバチの増加 と言う「プラス方向へのスパイラル」へ舵を切ることが、まわりまわって、我々人類にとって快適な世の中になるのではないのでしょうか？

## 環境にやさしいスズメバチ類に対する忌避剤の開発

スズメバチ類は、樹液を取りにクヌギの木へよくやって来ます。子供のころ、樹液に集まるカブトムシやクワガタを採りに行った際に、そばにスズメバチがいて、手を出せなかった方も多いと思います。この樹液に来るスズメバチ類の行動をよく観察してみると、どうやら「好きな樹液」と「嫌いな樹液」があるようです。その原因を探ってみるとその嫌いな化学物質が「花の成分」として広く分布しているものである事を明らかにすることができました。

この物質をスズメバチやアシナガバチ類にスプレーすると、大変嫌がるそぶりを見せること、おまけに、攻撃性を失う事がわかったため、昨年の9月に高知大学内に株式会社 KINP という会社を立ち上げ、現在、スズメバチ類への忌避剤、ミツバチ保護剤の開発に取り組んでいます（右の忌避スプレー剤は来年5月頃発売予定）。



この剤を、作業する草むらに向けて散布すると、スズメバチの巣があれば、慌ててスズメバチが巣から飛び出てくるので、事前に巣があることを認識して安全に作業することができますし、万一刺された場合、刺された本人や群がってくるスズメバチ類に散布することで、集中的な二次攻撃を防ぐことができると考えています。

## おわり

スズメバチ類は大変恐ろしい虫ですが、一方で農業害虫を捕食してくれるありがたい虫です。今までのように殺虫剤を大量に散布して全滅させるのではなく、作業をしている間、ちょっとだけ他所に行ってもらう、あるいは、ミツバチの巣箱ではなく農業害虫を食べに行くよう誘導する等のスズメバチ類と我々との共存共栄策を講じる必要があるのではないのでしょうか？

連絡先 783-8502 南国市物部乙 200  
高知大学農林海洋科学部内 株式会社 K I N P  
090-4334-4201  
info@kinp-chem.co.jp

